行けばわかるだろう

母は、自分のことよりも、食べ物につけても、
僕らの発育と健康に、一番、気を配っている。

僕は、自分の部屋に戻り、畳の上に大の字に横になった。
一人になると、僕は彼女を思い出す。
彼女のことが頭に浮かぶ。

先日、安田が僕の家に来た時、
彼女の住所と寺の名を知りたかったが、
「小学校の卒業アルバム見ないとわからん」との事だった。

「彼女の家を探して会おうかな。
昼からなら、いないかも知れんので、朝、行こう。
しかし、彼女、旅行等で、家留守じゃないかな。
お寺と言うことだから、名字もわかっているし、
行けばわかるだろう。」

天井を見ながら、考えた。
下で、京太と兄貴の喋る声が大きく聞こえた。

次は、テレビの野球番組の音。
それが耳に大きく感じて、なかなか眠れない。

目を閉じると、彼女の顔が浮かぶ。

電車の中、駅、バス停にいる彼女の姿が、
次から次ぎへと浮かんでくる。

やがて、気が遠くなって行く。